



枇杷園白糸 前篇 下

913
1
3-1-2

愛知県有物品

枇杷園句集卷之三

秋

初秋

その秋の川はよしてゐる小きうら

独坐

松のふたは落さる秋しるひよりうら

ちめくや秋半の竹のぬれ葎

菴の戸へ塔ひ入ると相一葉



A913
1
3-1-2

星夕

かも川や半れやらつくる星もた夕
ての川糸のすくみよふとて
水あひ平島もゆくつての川
舟行

一さ不に舟漕入るよて此川

灯籠

灯籠の油なると復の事

霞

檀溪

霧にちるあつ誰往たれまの葉の煙

素外は師うむつりの追福の日

をりふふれも思ひある人くハ

丹はの書は師葉津の

紀風を

白雪ふれあつめ事をおもひつる

いまつる

いまつるや跡ふすしき度^の松
山よ^もあそびし稲妻^にゆる^る西の上
舟^もと^はゆる^ると^も

稲妻^{あり} 丘^{つく} 堤^の 塘^う 那

秋風

あき^う 岸^や 舟^もと^は 舟^へゆ^く 舟^もと^は
秋^風の吹^きを^う ^うと^は 露^の 月

須^戸寺^の戸^をを^あま^りあ^まの^う 岸

悼^松兄

あ^まり^き ^きう^りを^師の^中と^いへ^ん
あ^まり^き ^きう^りを^師の^中と^いへ^ん
よ^て年^のよ^ふ ^いと^も ^いと^も ^いと^も ^いと^も ^いと^も
先^さの^す ^き ^あ ^ひ ^た ^る ^に ^う ^ら ^ひ ^た ^る
な^け ^は ^い ^何 ^も ^な ^し ^や

秋^風や^り 夫^も ^ま ^さ ^か ^の 露

朝白

ひかりくや芝草のさく垣ねうち
朝さうぬあさ白へちし氣なく
いくほとの世を芝草のすけの枝
蚊屋こゝに芝草見ゆは枝の

萩

露萩やむすし枝垂る繩をこれ
のそくまてものかく萩のうらの草

うらまのほやによこる萩の小庭か
桂五亭

ふきおとて出留ふも居らう萩芒
萩ふ志をこれせふらこる西日か

萩

萩のねやるるゆく渾の萩の草
こゝろて毛をゆくりの萩の草

女師花

まを風へ——やこすもぬえちうりる也

廿七

阿きの秋み色あり花さき——さ
芒もいもかきりすんをのすしねん
秋——さたふへてややもあ芒ある
雲さぬのすやふ日のさけ芒さうち
都ふさう

は梅のすいさをかぬる雨ねん

廿八

まをみあく目のさび——さよの草

稲花

湖のさりのひくさよ稲のよれ

菴

雨の風のあ——まをさきさうくす
きうくすまをさきさうくす風のすれ

厩

厩に馬を飼ふに日のあたる河原うま
かきうまやれどもう一多くは田哉
十日にや藤吹しきて一の春
一うまに馬のすし一石を飼ふ

三河の國操堂をたふ日

小舟に楫さして夫翹

川の下流ふあふ

すけ一のあふふふふふれや

きき詠

厩に馬を飼ふに日のあたる河原うま
かきうまやれどもう一多くは田哉
十日にや藤吹しきて一の春
一うまに馬のすし一石を飼ふ

一ひとあさあめの中やうまにたり

鶉

わらわらやあさあめの中やうまにたり

略

考くればさすこころ時もかりりや

砧

小松吹付笑ハきあつこのよひ
小松きあつた露のひりきあつた

芙蓉

月宵く芙蓉日くたてし

月

宵くに来るものちれた月を友

須广行

ちち名雨の降

おどれたあや地

小松たもしくと入る

海人々あハ袖小もあつた月のる

あつたあつたあつたあつた

吹广すこれ 慥るも月の名孫也

あゝ〜よ〜

月〜く雁〜の低〜一途踏〜あ
空〜の家を覗〜もあ〜と〜月夜は
ひやく〜し月小亭ある木石〜ち
美代や山形〜下〜と〜あれ月
松〜竹形〜や月〜と〜者よ〜る
名月を心ふ〜は〜て〜と〜月夜哉
月見とて伸け〜岩跡と〜小松哉

十五日山行

おれ〜人と同〜〜り〜してあ〜ふ〜と
お〜〜あ〜ま〜の〜あ〜〜され〜二日三日
の月形とら〜り例の人〜か〜ふ〜ら〜して
南陽〜母の住る露もあ山の紫の菴を
と〜白雲跡をかく〜〜してつ〜あ〜
そ〜も〜と〜あ〜ひ〜と〜ひ〜と〜あ〜ら
思〜〜〜ら〜い〜と〜あ〜〜て〜あ〜ま〜ま〜

わつらに一里晴山嵐爰ををるありき
現に秋色よあけり入る木の梢に
月をまのまててその月おくれ初も
こゝに嬌しく是る

松ヤ子を松よあてて月見うき
雨の日信濃よゆく人をまうり

婁控を雨よの初こぬくの月
雨晴山月高

海山を洗ひ阿け垂る月おれ

中秋あ夕を月をけをる
十五お八雨あく降風木ををる
さうり吹あれますれを揚す

降ああをちあくくつうの月
秋の花をのりても志けし月おれ

白圓亭

古きやや老の寐さあにわる月

阜池亭

おもむく月を保てる蒼々那

山室た宿る月をけしきおめりち
ふれをそやくも麻寸らむるの
こる麻の朝ちうく来たるの
いふ可待せあふれやあつるよ
うも終ふとおをあしぬ

取あけても

花を月

そふまうのちり

画賛

海をを寄ふ如くけの標も月お外

贈伯先四十賀

千代の坂路の初雪よ白雪もふる

月の光のりてまよふる

おもむく月をひとも月の秋

とるりふむむしる 雲むす月のせし

硯静亭

いさよひや月ふらりゆく 萩のあり

八月十日 瓢合堂 記

るまきしそ

十六夜の空にゆれもする 瓢合堂 記

井戸田ふさ

いさよひもるまきしそ 月見るまむらひ

十三夜

梅いろみ田まゝの人も月見うさ

三河紀行

鳥也上人ハあくらもとら衆も世人ハ引
ち之そまおはし しのきわつ住みひ
ける山の雲のさかきとさとの都此
四糸う辻に菰むしる引もしそ住
まがりそハ行徳を積ううてみよあ

少とよこそあをれ笑くか〜〜け
あ〜〜画癡の少よをおもひ〜〜へき
つさふもあ〜寸山にそひ山よそひんめ
をい〜〜やや三河の國よあけ〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
此大樹寺少〜〜〜寺にす〜〜時九月
十三日ちり〜〜又殿の山よ〜〜〜
あ〜〜浄土宋少〜〜〜〜〜

底よハ水亭を湛へ白雲の頂よハ秋の
色を〜〜〜あり〜〜〜
〜〜〜山石根の青あ〜〜〜
をい〜〜

名をい〜〜月ち〜〜〜

秋景

秋のあや〜〜〜〜〜

秋のおれありきゆを思ひけしけさ
書あるに於十ひよきしむらさき七ひ
よきしあゆりあるし心やあつしきす
うあゆしきもあしきあうそへあられそ
こま古へ人の心ひふるし事ある古言のこそ
あみくるしむさしやきしちりやあき
くしきかほくの事なを文書く宗すて
西行もあひあともあうしき

あれきあすし作りも朽木
朽木はちりくくめうさくう思ひ人よあそ
よき木くけりう山のもよもふ所の
あすみりしとは誰人うあゆふて
あゆむ心をひきちうへきめかきく月
さしあふふおのけきあひあゆむ

秋のおき

あゆむりき

あのおくさめ

秋雨

秋聲う菴を

住む所一さとこそよるれ種のも

ころもり浦を

種のおあしとろくに日ハ入ぬ

彼山序

菴さの傍に豆よくひらんうを

秋山

枯さうくしき松こそよ色種のも

秋水

智の野に毛亦るも深よあまみあり

底

底をさう書あしと静し花もあふん

くめハけもあしゆけハ底のさう

さう山雪江う菴よあさうさう

門半して年ゆくはともあし底のさう

秋葉山の麓和国の屋敷

いふやふにさしりて

啼之鹿のあやうきと深き梅のあ
明果さううあ——らも鹿のさうさ

（兼）

まきさの山路つすれぬもあつれく
むこつたゆハ老らぬさくはむ
道元叔帰故郷

父ぬを 見る多れしさをら菊の巻

訪草菴

いふやふし菊もつるぬ庵の度
白香の——らうのあやうきさくか
花ふると菊もあつ寸ハるる草

大中九日

半ひ人ふ一枝らぬさくみたる

紅葉

うへにまねハ水よあしく紅葉

秋暮

あふえる山のさよあきのくれ
よハ月うおやうやするそ秋のくれ

大蘆亭

日のくれぬ日ハるけれともねえれ

薬山子

おしーろまににちりまうけい

無題

秋の十ころはく枯枝うま
稻まくや川や田よ替々うま
片扉あまうくささ飽う那
松うさよ松あよ菴の灯ハるに

悼如東贈帯梅

あまきそりの人の腹さへつれてゆく

八月八日の日越行上人を江の國へつを
うみしそひしやくやうて甲申の院とつ
やまにゆもさふ遠の内を三かを發給ハ
おとらふしきるお給の上まもすきこと
お勝よそ申し〜〜る

おとらふしきるお給の上まもすきこと

東次郎あて

何をし〜のひとら〜す〜は〜あ

九月十日白きおの國

有るおの國

月少し日みるにゆり

ふあ〜のやう

卓池輯

枇杷園句集卷之四

冬

時雨

その時をさきかきしるはあとのや
雪はよてししるはあとのや

竹葉軒

さきかきにさきかきしるはあとのや
独居や古人のやうの小軒しる

芭蕉忌

世にふるはさしき月をせ切のゆるる

素堂蕉翁の善友とて一日同農
たやの破れやれく霜の荷葉のゆる
を悲しむ世の形見草うもして甲子
吟行を誦しとて曰おあるおもむさ
秋を金のちんねりその牡丹さき

隠士の向うれかちりやしうまそそお
執を昇しその手向亭とて

月時雨さりとて

古きけしきうま

一やにわきしとれると須方明石
山茶花の手をうけもれと時るる

茶室迎友

宗子いふあるやしとれぬ松のうけ

おしぐれに小鏡焼ある白ひら

東門公子と申せざる公子あそし
雪塚のゆきもに物くもして水獲もの
あまもつと中に一ひとつを平のま
に下さる此ま又子琵琶の上手
あ人あやしるこそおれに呉胡
家の子ありちう比あふあに

いふ琵琶造りかしくまのわさ
とらすのちのゆりとして人く此入
はと花ふおさこの一あひり
おちりたり籬中挨拶そのおの宗通
として四行ききなり
嘈々切くとあきをまへよとに
あそれみしこの時雨も月も
を二ひぬ

時雨来るうらうらまの雲の上
かる夜のあるさゆこそ世の縁あり
あはれとてはなほ世にまよひてはなほ

落葉

落葉せく朝のまの風をさらせ
あさくや落葉捨て下す屋根の人

不破の関よみ

おれおあけそりのるの鳥かく落葉あり

大和の國を行終りと畝火のや万を
いほこ耳なりし山をとりしるをせまつ
あるとくゆああまに樵夫の立ちるを
叫くけきすのうくもあやさんううく
ものむむやひやけとばしりむるけ
—きこもるんせ

叶人も耳なりし山を落葉捨て

木枯

木枯ししやうさのいぬへまゐる他の野

栞写

ちろくくや日もとわくしーの苔の上

木枯ししや白ふくくゆる春のしんき

木枯ししや海一をまよおる月

綱代守

宇治よ妻あつしやうらうる思ひ

千尋

せほのぬいぬ袖のうしろをみまわらう

柿まるやん露のうちふも時やわたり

五道亭

おろ鴨うちけを枯らす戸をひ

大はふて

湖を野て切事

おあけうら

冬月

あくるまも采ふあらしの月
ささしくや苔ふむきの月夜哉
さほくや障しあくまやきの月

大魚追悼

ほへ入あらしはふよかれ尾甚

枯燈

あらししう住やくれをむらる

詩仙堂帰路

大山のささもくれゆく枯燈哉

訪野荏

かれくやゆまたにおふ庵の大

ま阿ふ菴を訪ひて

これ見よや霜の田芥を菴の忘

甚ふからひ月よりきん夫妻の枕を

五百生の宿願少くはしあふ一夜の露路や
きえぬ涙そまらふささすも哀も此悲ひ
よき道とこそ中にならむしほみより子
れおひるあまといまふまへはさて申してハ
あゆめやいふをりふいたづてをちる
あわしの二天一心を見るうちちるは
又あふさしとせめものあふさし
山吹のうまやまおさささし松のや

朝沼のさやを眺むる常に
ゆく

雉も鳴り犬も吠えおれ山を引

氷

勝山を舟さし下せし藤舟に
さう日を見す風あふく雪さへ
障りの雪ささささへを御す

白浪のうけさるハ氷る小ささうま

冬木立

芭蕉翁百回忌

十句巻 仄

ちかこよ子ものせしる冬木立

雪

まてに雪れま山見しよるし
ちかこよ子人のせしる冬木立
雪やあまの雪に埋れし

雪掃やのちあまの雪に埋れし
さいつても雪に降ちしと雲山
月雪やこよひも月ハ雪の内

念

毎ふちあまの念にさるる花もまら

許中

あともなほし麻さめの友と許中
南無月夜南無と雪時許中

春暮

年のぬきに暮むしをる日未だ少
づふにゆく夏に湖水あを榴の洞と
いふ藤竹をうち候水をくくも其
上にあつ地塘尾を枯て雪のこく
息鷗新吹き水底は清し是より
路を西にとここといふ苔跡中々に廣く
なるして民衆適に見伸いさや年の

用意よとて笠道業のうきう松蔭糸
やうのもの列たりき

ゆくとも——の廿九日も子の日う南

あはむ——む月の一とて——きめの三五
いふ暮雨巷の大人いさふをれて共に
子日き——やふ之行にあけ柳たぐれ
ちか初くとまよ月雪ゆのささりつ
おまはをも赤まにめらるる来りの二年此

始終を本よせしむるのいとめてこく
心少く感ある也

野秀亭

候もさや胎の多るる葎のうけ
ゆくゆくーのころりともせぬ山を分
年もさや小松さうも来る日市吉
立ちまきき我を見る

ゆーくれぬ本系角力のあるそひふ

花月一葉のあそひにくめの日も
既よくれにゆくゆーもまや一瓢の
酒の強さをくまなくさすべし
瓢 曾十三

ゆーくれぬ
鉦 おさへし

枇杷園白集卷之五

雜

倉澤

つふも見てくつらも不考の山

より 新 馮月々四十の賀よ

より 新山あきさひの恥しき

大虫の隈あきさひのよはひく郡

任のひきりかきさきのまを

海人の子等の朝の于家にむれむら
ゆ木拾ひあるさなるうぢさうゆぢち
末小のうれさなをさしきり帰るり
さてあるしゝあるよあはれおあはれ
写のまくら小のさうしにさあるしゝ
まくら小のさうしにさあるしゝ
あはれとあはれと

やま時やうらむしころりと和歌の浦

大黒賛

茲よ實よ四時うやうの子の日よ

多春園の桜見せさせまふとありこ
くくひ侍る泉石のまらハササ
木を植るあはれ子のこく植させま
七日の日早き桜ハちをほひて汀のけ

わしたくおもしるくく此の上
僧堂の中しりる象の景色もおもひ
やられまの法又僧およ小き舟とて
ちり侍れとてようしとふもゆきも
あつとささの五文ふみちるしとのたれ
さくら木深さよまたふいしるの停雲
図よゆき

朝上停雲図を在甚深雲

暮下停雲図を甚深雲未

若峰晚色

東色三ふ百峰晚雲中
出芙蓉芙蓉白雪千秋色
入蜀林照古杏

平曲會式

床頭置琵琶二面

彈中或弦樹則頭設一面

急以代之

曲中禁談笑吸烟管步
唾壺必應有意凡曲調
者貴飲暢々々則說盡

心中無限了

管中無事二月の光

示るる

何の時よりあやしくん所の中として連取

あそをきれらるに山居去る水のさるれ
ふよさなりその白葉身わたりて
おほせのしきりてして厨壺に去る枝を
赤入さおろしきるをしめ終へるあり地
るのよこそ

曲終不收控更唱祝世又句

琴中助言

あはふき此曲終るる

自然を夫へり爲此一と曰此小成を
何とら何とらいせん曰寂し酒をわら
何とらいせん曰躁し米をわら何とら
いせん曰おちを又叱しと曰采をらと
世何と自然をこの一海人を瓢然と
ししを説て曰

鷗く樺をのまれと瓢

同し流の藻空草 虚瓢

鷗く樺をのまれと瓢

同しちうれのぬる瓢 虚瓢

ちうれおちを冬の海 虚瓢

松兄輯

後

よ樹のふちをふりて
一年三百六十日の風月を
ふりて
おぼす
自り
余

年々
つ
か
新

布足庵

岳輅

藤園堂
44P-
450

愛 知 県



1103269308